

重なり。

3. 15. エシ《～ですよ、～ます、～でしてね：やや軽いていねいさを示す文末表現、または間投詞として》

[eʃi エシ, esi エスイ, isüi イス]など。ネシと同じく自由なつづき方をする。

(ア) もうじき雪いっぱいこと《たくさん》降るエス《降るでしょう》。

そんま もー「っ」こもこてて《そんなに着ぶくれてちゃ》、みばわ]るいエス《かっこうわるいですよ》

(イ) 「ひんど《ひどく、非常に》高ご売れたでば、喜んで帰ってきだでば、娘いながったどいす《いなかったってことです》」(『民話』p.186, 虎丸・加藤ワキ氏)一会話や民話では「～とエス(=どいす)」という伝聞形式が多いようである。

† † †

文末表現としては、原因・理由を表す「～シテ、～ナイデ」とか義務・必然の「～シナイバ(ダ)」などの文の中途の形でおわる言いさしも多いし、推量の「助動詞」であるはずの「～ロォ」のようにすっかり文末助詞になりきったものもある。新発田市の西北にあたる葛塚(現在豊栄市中心部)・新潟などの準体助詞「ガン」をふくむ表現も新発田市内でしばしば耳にする。「カロノ ウロン屋レ食うたガンわ《角のうどん屋で食べたノは》うーまいかったわ」。新発田方言は共通語と同じ「ン、ノ」をつかう。

* * *

前号「雪ふっつつ」の訂正：p.8, §4の文中、『新潟方言と古語』の著者・野口幸雄氏を国立国語研究所の「新発田地方研究員」と書いたが、柏崎市の剣持準一郎氏から同氏が新潟地方研究員でいらっしゃる旨、ご注意をいただいた。おわび申し上げます。

毎回小論にご批評を下さり、「雪おろし」についてもお教え下さった吉田澄夫先生が1987年2月に逝去されたことを知りました。ご冥福をお祈り申し上げます。

(TAKEBA Ryooiti)

共通語のネに近く、文の意味を強める。「～ガネ、～カネ、～ロネ」などの組みでもつかう。不確かな確認・内省では「ナ」もつかうが、「～ガナ」の組み合わせはない。ネが優勢で、～カナ・～ロナより、前述の組み合わせが一般的。

- (ア) いやー¹いや、さー¹むい(サームエ・サーメ・サーミ)ね。《実に寒いね》
- (イ) もお¹は あー¹め(雨)降¹ってんがねえ。《とっくに(困ったことに)雨は降ってるんだもん。～降ってるじゃないか》
- (ウ) おめさん、かー¹さ(傘)持ったろおね?《持ったでしょうね》
とお¹きび《とうもろこし》要ら¹んかねー? ーんだ、きょ¹わ《今日は》要らないね。
- (エ) 「そうか、だけや《それなら》、おれが語りに行くかな。」(『民話』p.200,語り手は岩船郡朝日村)

3. 14. ネシ《～ですね、～ますね：ていねいな確認》

発音は [nesi ネスイ, nefi ネシ, nesui ネス, nesə ネサ] など。東北一帯で用いるが、新発田では三、四十年前にすでに老人語と感じられていた。～カネシ・ガネシ・ロネシ・ヤネシなど、「ネ」と同じつかい方をし、また、～ダ、～スル、アッチェ《暑い》などの文末につづけるほかに、ていねいな～デス、～マス、～マセンなどの後にも接続させることがある。文中にはさんで間投詞としても用いる。1種の敬語のつかいすぎであるが、丁寧な気持ちを表すのに適している。『分方』の「小詞」に「ネシ 奥羽・奈良県。ネス奥羽。ネサ青森県・秋田県。ネェス 秋田県。」など。『文末』(上)p.373に「青森県下にも、津軽・「南部」に、「ネ」の分布が見られる。津軽西岸地方の「ネー」は、津軽の「ネシ [i]」をつねとする人々からも注目されている。」とある。

- (ア) よお わかんないネシ《よく わからないですねえ》。
- (イ) きんなも来なったがネシ《きのうも来ておいででしたねえ》。
- (ウ) 「ものにならぬ男だど、思わったんだけねす《思えたんでしょうね》。」(『民話』p.16,菅谷・松田ミイ氏)ー推量表現。
- (エ) 「むがしの話ねす。兄やと弟あったど。」(『民話』p.95,小戸・若月トシ氏)ー名詞に直結の例。
- (オ) 「近所の衆、町、行くあったでねす《行くことになったのですよ》。」(『民話』p.168,中谷内・青木キミ氏)ー中止法につづく例。
- (カ) ほーんに今年わ あっちよありますネシ《暑いことでございますねえ》。ー敬語の

3. 10. ト 《～だそうだ：伝達》

自分の聞いたことを人に伝える文に用いる。相手にたずねる場合は「テ」が多い。スット（するト）・クット（来るト）・アット（有るト）などとも発音するが、「ネット（練るト・寝るト）・ケット（けるト）」などは聞かない。（条件形としてはネットなどと言う。）

- (ア) 病院のわきたまの木が安兵右衛の生まれたとこだ「ト《だって》。
- (イ) 「小川」ってのを中谷内でわ「イガワ」だか「エガワ」と言うト。
- (ウ) 年行ったショガタ《人たち》だとフィ《火》だの、クワジ《火事》だのって言うトサ。

3. 11. テ, ッテ 《～だそうだ：伝達, ～と言うのか：伝聞》

ト(3.10)と同じつかい方のほかに、相手の情報をたしかめる「テカ、テカネ、テダカネ」《～と言うことかね?》, 自分の伝達内容・意志を保証する「テバ」《～なんだよ》, 理由づけの伝聞「テテ」《～というわけで、～とて》などの組み合わせができる。共通語の「って」と同じに連体句を作る《～という》の意味の接続助詞としてもよくつかう。

- (ア) みんながカモォ《カマウ：からかう》すけ、来ないッテ。
- こったま《しこたま》株に損したテ《株で損をしたそうだ》。
- (イ) 水原町の瓢湖^{すいばらまち ひょうこ}テここに白鳥^くいっばいこと来ッテサ。

3. 12. ワ 《～するよ、だよ：意志、確認》

男女ともつかう。関西方言のように下げ調子の終助詞だが、「ダ^ワ、スル^ワ、シナ^ィワ」などの形で用い、「デス^ワ、マス^ワ」とは言わないようである。終助詞といっしょの「イキマセンワネ（またはネシ）」はつかう。

- (ア) いやーいや、もおは おら、だめだワ。
- きんな《きのう》聞いたこと、ぺろっと忘れてるワ、あのしょ。
- (イ) 雪かがーっぽて 何もめえないワネシ《見えませんねえ》。
- 消し《消しゴム》で消さないばなんないワネ。

3. 13. ネ 《ね、よ：確認》

ネ・ネシ・エシは、文体を完成させる最終的な終助詞で、上記のいろいろな文末表現の後に追加される。

3. 6. ナ 《～するな：打消しの命令》

共通語の終助詞と同じだが、方言的な形で現れることが多い。「～ナヤ、～ナヤネ、～ナッテバ」などの形式で用い、また、スンナ¹《するな》・ク¹ンナ《来るな》のごとく、連体形の終わりのルは撥音になることが多い。

- (ア) それ、あ¹ちちゃんのだすけ、ちょ¹す^ナ《よその人のだから、いじるな》。
- (イ) はいす《そらそら》、こみ¹ともないことす^{ンナ}¹ヤネ《するなよ、しちゃだめよ》。
- (ウ) <鶯女房がきこりに>「どんげな事があっても、十二月の部屋だけは、決して見てくれる^ナ」(『昔話』p.279, 西蒲原郡)

3. 7. コッサ 《もちろん～なことさ：当然の結果》

むろん共通語「～だこと、～ことさ」と同じく「事」をふくむ表現であるが、文末表現の終助詞として新発田ではきわめてよく聞かれる。動詞・形容詞・助動詞「ダ」につづく。

ほかに、コトツェ [kotto] (コト+ヨ?) も同じ意味で用いる。「コト」だけの場合は感嘆を表す。例：「んだねえ、この笹だんごのうーまいコト!」。終助詞「サ」も文の後について、《まったくそのとおりだ》という確認を表す。そおだサ、すっサ、ないサ、来ますサ、など。命令形、勧誘形にはつづかない。(ネッサと聞こえるネスは本来「ネス+サ」か。)

- (ア) そんなにテコモリ《山盛り》にしたら、ま¹と ふ¹とる^{コッサ}。
- (イ) アテバン《下敷き》しないば、きれいにギズ《線》引けない^{コッサ}。
- (ウ) 雪多いすけ、今年も米の出来わ いい^{コッサ}。
- (エ) 弟もか]てて《仲間に入れて》やんないば、だめ]だ^{コッサ}。

3. 8. デ 《～ぜ、～しようよ：勧誘》

- (ア) いっしょにダボ《おふろ：幼児語》入ろお^デ。
- (イ) お]ー、みんなしてパ¹ッチしよ^デ《めんこで遊ぼうよ》。cf. 「しよ¹っ^テ」とも言うが、これは「しよお¹ッテバ」に近いニュアンスの場合もある。

3. 9. ド 《～ぞ：うながし》

- (ア) おもっしょないすけ《おもしろくないから》帰る^ド。
- (イ) ヤデモカそ¹っつけな《そんな》ことして¹と、けーがす¹っ^ト《けがするよ》。

といった意味を表す。どうも共通語や古典語のバとは性格のことなるものであるらしい。『分方』『小詞』には、

バ 誰ガヤラォーバサ。誰がやるものか。反語。庄内・越後中部以北。

と報告されている。「知ろうバ、～バサ、～バヤレ（粗暴な言い方）」の形で用いる。「知るまい」など打消しにはつかないが、自動詞、他動詞のいずれの推量形（アロォ・フロォなど）にもつづく。

(ア) ノメシ《とらの巻、参考書》なんか見よおバ《見るものか、見るはずないさ》。

こげに雨降るときに水浴び《水泳》にだれが行こバ。たまーげ] たね、ほんに。

(イ) 「『誰が猿どご、嫁に行くものあろばさ、お前、馬鹿だろ。』と、爺さをば、そゆうだであ。」（『昔話』p.2, 菅谷・松田ミイ氏）

このき（＝このきり）の若い衆にできろお（＝できよお）バサ。

(ウ) そっつぁ《そんな：粗野な言い方》ことなん、知ろバヤレ《知るもんか》。

[注：筆者自身、中学生のころ、うっかり父（新発田育ちの2世世代）に向かってこう言い、手ひどくしかられたことがある。戦後引き揚げて来て2、3年目の新発田人3世には親・目上に対して言うべきでない言い方のけじめがついていなかった。]

3. 5. ネッカ、ネカ 《～ではないか：反論》

発音は [ne(k)ka] で、[nɛkka] dehanai。打消し「ナイ」と不特定・疑問の終助詞の組み合わせかもしれないが、ナイカ [naika] と発音されることがないので、終助詞「ネ」（後出、3.14）のようにも思われる。「シラナイネッカ ネ」と当のネやネシ（3.15）とも共存する。「小詞」にあるネーカ（富山）、ネーカイ（和歌山）、ネスカ（秋田）と同じか。（それらの意味は《ねえ》となっている。）なお、語中のカを有声音化させて（濁音で）言うはずのザィゴ《周辺部》の行商の婦人たちでも、[negaネガ] とは言わないが、特に促音に聞こえない場合もある。あるいは、新発田方言の長音同様、促音も1モーラの長さをもたないために、朝鮮語の濃音（喉頭緊張音）のように2モーラ分の [ne-k'a] なのではないだろうか。

(ア) ザ¹ックも できな] いネッカ 《お手玉もできないじゃないか》。[注：デキネッカ。重母音をふくむナイはネ nɛ, ネッカのネ ne。]

(イ) 「稲刈りも終わったすけ、祝いの餅をついてからに、祝い事をしょうねかい《しようじゃないか》。」（『昔話』p.102, 岩船郡）

日本語の終助詞は古代語以来の長い歴史をもつ。『万葉集』冒頭の雄略天皇の歌にも「家聞かな、告らさね（家吉閑名，告沙根）」《家を聞きたいな。言いなさいよ。》とあり、「焼きほろぼさむ天の火もがも」（万3724，平安時代にはモガナ）のような複合終助詞も行われた。表現を新発田方言らしく仕立てる文末のことばから，終助詞およびそれに準ずるものをひろってみよう。ほかの助詞につづく組み合わせの例文も合わせて示す。岩船郡など新発田市・北蒲原郡以外の話し手による用例も，同じ言い方があれば引用する。水沢謙一編『越後の昔話』（未来社，初版1957）からも多数用例をお借りする。

† † †

3. 3. ガ 《～だけど：意見・状況判断をのべる言いさしの形》

共通語と同じだが，新発田ではこの「～ガ」および「～ガネ」で終わる表現が目立つ。「～ダガネ・スルガネ」は岐阜や鹿児島でも用いる。なお，鹿児島の子どもが友だちの家の玄関で「あや¹ちゃん，遊ぶ¹ ガー《遊ぼう》」と言うときのガもこれであろうか。

(ア) <キジが栗に>「猿どんが，おらどこへ，晚げ，夜討ちにくるが《来るんだけど》。」「泣かんでもいい，おれが加勢してやるが《してやるからさ》。」（『昔話』 p.193，岩船郡）

(イ) 「そごの水際に大っきだ大蛇死んでいだでがね《死んでいたんだけどね》。」（『民話』 p.51，菅谷・松田ミイ氏）

3. 4. バ 《～だろうか：反語》

今日の仮定形につく接続助詞（条件形語尾）のバは，古典語では未然形について「～ならば」，已然形について「～なので」のような意味を表した。古代語では「無く[△]」「せず[△]」と連用形に清音のまま接続していたものが，後世濁音化してバになった。古語の終助詞にはバヤがあり，未然形について，希望を表す。「セバ・ダレバ・ナイバ」などの条件の接続助詞のバも言いさしの形で「～すればいいよ，～したほうがいいんじゃないか」という意味の終助詞に近い働きをするが，今回は取り上げない。

しかし，ここで取り上げる反語の終助詞は，新発田方言の動詞の言いきる形（陳述形）le⁽¹⁰⁾「ショォ《しよう》・コョォ《来よう》・アロォ《有ろう》」などについて，《そんなことを するものか，くるはずが ないだろう，そんなことが であろうか》

⁽¹⁰⁾ 小論「雪こざいて あべや」（『岐阜教育大学国語国文学』5号，1986，p.9）

3. 2. 終助詞の微妙なあじわい

「私が文末詞と称するものは、世に終助詞または感動助詞と言われているものである。」（『文末詞』上、はしがき）という「文末詞」の概念は魅力的であるが、本稿では、ほぼそれにあたる語類を終助詞とよび、終助詞をもふくむ文末の句まで合わせて「文末表現」というよび方であらわそうと思う。新発田方言の文末表現として、述語の後半部とでも言えそうな「ソォセバ イ^ㄱィネッカ」《そうすれば いいじゃないか》、「コヨォ^ㄱバサ」《来るもんか》などまでをここに記録しておきたいからである。同書によれば、後藤蔵四郎氏の『出雲方言考』では「感詞」とよんでいるそうである。また、『分類方言辞典』には都竹通年雄氏による助詞・助動詞の語彙が「小詞」という名称で掲載されている。⁽⁹⁾

文頭で独立語の性格をはっきりと示す接続詞や感動詞に対して、終助詞あるいは感動助詞とよばれる語の独立性とは、格助詞を名詞からすこし離して（気分をこめて）発音する場合と同じぐらいの遊離をすることが多いといったところではないだろうか。たしかに日本語では終助詞が発達し、それぞれのみじかい助詞は、英語の文末の付加疑問文……, isn't it? のような、文に似た意味内容をふくんでいる。日本のもう一つの民族語たるアイヌ語も終助詞または類似の語をもち、文からの独立性がつよいとも言える。

とあん ぼんめのこ しの ぴりか なあ。

《あの むすめは ほんとに きれいだ なあ》—感動

ちえプ えこイき や?

《魚を（君は）捕った かい》—確認

アイヌ語の場合も、終助詞は文の概念的な意味内容をつつみこみ、相手に語りかける話し手の気持ちをじかに伝える役目を果たす。

これに対し、朝鮮語の文末表現は、「疑問形」とか「勧誘形」といった語形の中に、切り離せない語尾の形態素として組みこまれているものが多い。終止形語尾の -da と同じ次元の疑問形語尾、勧誘形語尾と考えられる。

Jagi ro gesan hamnika? (疑問形) ← hamnida. (陳述形)

《自分で 計算 しますか》 《します》

Naeir do onunya? (疑問形) ← onda. (陳述形)

《あすもも 来る かい》 《来る》

(9) 「小詞」は永田吉太郎編『方言資料抄、助詞篇』、橘正一編『諸国助詞方言集』による、とある。

ハ「サ《稲木：あぜ道や農道の端に立ちならぶハンノキ（榛）に横棒をわたした所に稲束をかけて干す》¹⁾ ハサ秋田・新潟・富山・福井・岐阜・奈良，ハザ新潟・石川・伊那・静岡・尾張・滋賀・鳥取。田のハザ《間隔：九州》・ハザコ《畑のあぜの間：越後・岐阜県吉城郡》（『全方』），ハザマ《間》で干すからか。
 ブ]ト《ぶよ，ぶゆ》¹⁾ = 共通語（『日国大』ブトの項「→ブユ」）

§ 3. 新発田方言の文末表現

3. 1. 藤原与一氏の「文末詞」

ある方言をいかにも地方色ゆたかに仕上げる効果的な要素の一つに文末表現がある。新発田方言については、まだ接続語や間投詞など、書きのこしたものが多し、方言の彩りとして重要な音声面の記述もたりない。しかし、「雪」シリーズのしめくくりには、その文末表現を取り上げたい。『日本語方言文法の世界』で藤原与一氏は次のように述べている。

日本語諸方言での毎日の文表現の生活を見るのに、全国的には、じつにさまざまな文末話部が、まったく自在につかわれている。この傾向は、おとろえたりはしないで、ますますさかんである。（p.50）

藤原氏は「ワカリマシタ カ。マイニチアツイコトデス ネ。」などの「文末の訴え成分、特定の形成物、『ネ』など」の独立性、遊離性のつよいことから、まず「文末助詞」⁽⁸⁾ と呼び、のちに「文末詞」と改めるにいたっている。「ハヤク オシナサイッ テバ。ハヤク シロッ タラ。」あるいは「ダッテ シラニンデス モノ。」などの文末表現をその前の成分からは孤立した文の成分と見、「文末詞」と改称した。文頭におかれる接続詞と対照的な位置にある文末の成分であって、前の語に付属する助詞でないと考えるわけである。⁽⁸⁾ 藤原氏は、入れ子型の図を利用した「感動を表す助詞」（終助詞）についての時枝文法の分析法（図1）を紹介し、さらに図2のように、文末詞の独立性を示している。（『文末詞』上，pp. 33～34）

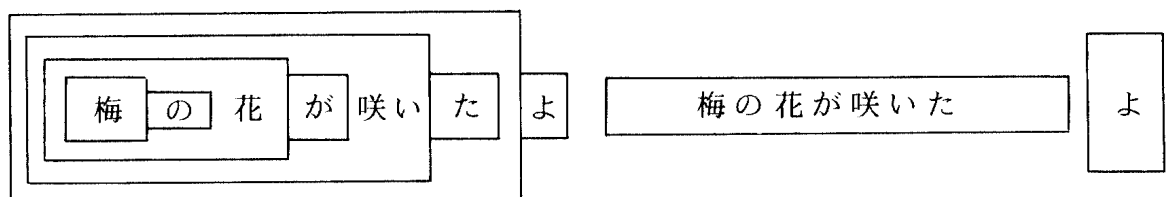


図1 時枝：「よ」が文全体にかかることを示す。 図2 藤原：「文末詞」の孤立性を示す。

(8) 藤原与一『方言文末詞<文末助詞>の研究』（上）p. 30（以下『文末詞』上と略す。『昭和日本語方言の総合的研究』第3巻，春陽堂 1982）

- ウ¹ルメ(ッコ), ウルメッチョ《めだか》 出雲(『物類』)・青森・秋田・新潟・長野県下高井郡・愛知県幡豆郡(『全方』)
- エ¹ゴイモ《さといも》 1 長野・飛騨・愛知・三重(『全方』)
- ガ¹イロッパ《おおばこ:カエルの形の葉》
- キョキョ¹ジ, チョチョ¹ズ《よしきり:鳴き声からか》
- グ¹ズ《はぜ(沙魚)》 1 《はぜ》新潟県三島郡・福井県居坂井郡, 《かじか》越中・長野(『全方』)
- ゲ¹ック《かえる:鳴き声からか》 1 ガグ長野, アマガク宮崎・鹿児島・沖縄県国頭, ギャク新潟・長野, ゲーツ新潟県岩船郡(以上『全方』)。cf. ガイルマチョ《おたまじゃくし》新潟県北蒲原郡(『全方』カイロの項), ガイロッパ(上記参照)
- コケ¹《きのこ》 1 北国・美濃・尾張(以上『物類』)・加賀(『加賀なまり』)・岐阜・北陸・長野県北安曇郡(『全方』)
- ズミ¹《みみず》 1 シミ《細いみみず》越後(『全方』)
- タチ¹コ《スズメなど野鳥の巣立ちしたばかりの子》 1 仙台・東北, タチッコ長野(以上『全方』)
- タ¹ッコ《太い根》 1 《木の切り株》福島・新潟県北部(『全方』), アイヌ語 tapkop 《小さい山, たんこぶ型の山》— 達古武岳(釧路村)ニウシタプコフ(木が・群生する・たんこぶ山:深川町コップ山)・など(山田秀三『アイヌ語地名の研究』巻2~3)を《切り株》に関連づけるのは無理か。山田氏は東北の田子(タッコ)や童子姫の伝説と tapkop の地形とを関連付けている。
- ト¹キ¹ビ《とうもろこし》 1 トーキビ・トキビ秋田・新潟から奄美大島まで全国的に分布, トーキビ・トーギミ東北・関東から奄美大島まで(以上『全方』), 東北方言と接触したアイヌ語では「キミ(沙流・幌別), マメ「キミ(八雲), 「トキミ(美幌)。
- トカサ《鶏のとさか》 1 『分類方言辞典』鳥獣虫魚の項に「えぼし・かがみ・かぶと・きのこ・けとー・さが・とりさか・はーん・びく・なっつあい」等々があるが, トカサは出ていない。/tosaka/のsとkの子音交替(言いまちがいのブンブクチャマガのような)と「鶏の笠」の類推か。古語サカ・トリサカ「冠 佐加」(『和名抄』)。なお, 新発田市の北, 中条市に鳥坂山がある。
- トンボグサ《つゆくさ》 1 新潟・岐阜県吉城郡, 《かやつりぐさ》近江(『物類』), 《かたばみ》京(『物類』)・関東・福井など(以上『全方』)
- ハ¹リゴケ《はりだけ:きのこの1種, 食用》

† † †

ケバサ《健康状態←鳥の羽の状態からか》

ヤ¹マイ《宿病・業病》¹ヤマ¹ィ《単なる病気》と区別される。ヤメ¹ル《体内から痛む、とう痛をおぼえる》

ヤミジョ¹ォズノ シ¹ニベタ《病み上手の死に下手》

イキドォリ《神経痛で胸がつまり、息苦しくなること》

イ¹カイカ《肋間神経痛などの痛み》

メ¹ッパチ、メバ¹チコ、メ¹クサ《ものもらい》¹メッパ《目のふちのはれ物の痕の引きつったもの》信濃（『倭訓栞』）・山梨，《ものもらい》新潟県岩船郡，メッパス新潟県中蒲原郡，メッパチ《またたき》山形県置賜地方，メッパチ《めだか》三重県度会郡・和歌山県東牟婁郡（以上『全方』）

カ¹マイタチ《突然皮膚が切れて赤い傷口「アカミドコ」が現れたり、血のにじんだすじ（ギズ）ができたりする現象。空中の小さな真空が原因とも考えられているが、どうか。出血することもあると言う》¹《小旋風》宮城・福島・千葉・静岡・奈良・和歌山・京都府竹野郡，《小旋風による裂傷》東北・北陸・飛騨・三重・奈良県など，《かまきり》新潟県中頸城郡・長野県上田・神奈川（以上『全方』）。冬の季語「鎌鼬かまいたちかや萱負ふ人の倒れたり 水原秋桜子」（『歳時記』鎌鼬）。越後の七不思議の一つ（『日国大』）。

カラスガ¹ェリ《こむらがえり》¹カラスマガリ長崎・熊本県南関（『全方』），ガラスィマガイ《手足の指のけいれんして痛むこと》琉球（『分方』補遺）。garasimagai《同上，コムラガエリではない》，コラムガエリはkundaḡagajaa クンダアガヤー，琉球でもカラス garasi は凶鳥とされる（『沖縄語辞典』）。

ヤ¹ケ（ッ）パタ《やけど》¹ヤケッパタ新潟・福島・関東，ヤケパタ東北，ヤケパタ香川県木田郡，ヤケハタ中国・四国・大分・福岡など，ヤキハタ広島・四国など，ハタ淡路島・徳島県三好郡（以上『全方』）

2. 6. 生きものの名詞

アリ¹（ン）ゴ《あり》¹共通語アリコ・アリノコは「アリ，特に羽の生じないもの。また，アリの卵。」（『日国大』）

ウラ¹《うれ，こずえ，葉の先》古語ウレもウラ《末・裏》から。「花橘を引きよちて折らむとすれど宇良若みこそ」（『万葉』3574）¹本州東部・山口・高知・九州（『全方』）

2. 5. からだと健康状態の名詞

マキメ《つむじ》♯東北・北蒲原郡(=新発田市周辺)・長野県南佐久郡・神奈川県・千葉県山武郡，《渦巻き》福島県信夫郡(『全方』)，巻目《渦のようにまいているところ》(『日国大』)

クチベタ，クチ(ッ)ベタ，クチッパタ《口のまわり》

オト《声》「そんまでっかいオトにしゃべんなや《そんな大声で話すな》」♯新潟・岐阜・長野・埼玉県秩父郡(『全方』)，青森県などで《音信，霊界からのたより》の意味でも用いる。古語で《離れてもはっきり聞こえて来る，物のひびきや人の声》(『岩波古語辞典』(1974)や《人の気配，うわさ，おとさた，返事》の意味に用いる。万葉仮名のオトは乙類系の表記(於登・於等など)，「をとなせそや，みそか(密)なれ」(風俗歌；『日国大』)

メ^ㄊ《目》[me ~ me:，一般に1拍語は長めに発音されることが多く，後ろに助詞がついてもメ^ㄊガとメ^ㄊガのどちらにも言う。アクセント核は長短共に助詞の前にある。cf. テ^ㄊエ《手へ》受けれ，ト^ㄊオ《戸を》開けれ」など。]

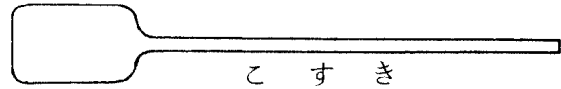
ヨビ^ㄊ《指》♯古語のオヨビとの関係はどうか。「指 ユビ 俗云オヨビ」(『名義抄』)，「秋の野に咲きたる花をおよび折り数ふれば七種も花」(『万葉集』#1537)。ほかにユ~ヨの交替の例はヨ^ㄊ「サレ《夕方，ユーサリ》，ヨ^ㄊベ^ㄊナ・ヨンベ^ㄊナ・ユンベ^ㄊナ《昨夜》，ヨック^ㄊリ《ゆっくり》」など。

ダンベ^ㄊ《陰茎》『新潟方言と古語』「チンポコ」の項に「ダンベはおとなのものだけにいう。」とあるが，新発田では子どもも用いた。♯=加賀・越前・新潟県・岐阜県吉城郡・富山県砺波郡・福井県坂井郡。ダンベ《時計の振り子》新潟県頸城地方・岐阜県吉城郡，タンベ《しり》鳥取県能義郡(以上『全方』)などとの関係があるか。この語があるので，新発田市東部の旧赤谷村や会津，関東の方言で用いる推量のダンベ^ㄊは，新発田・新潟では使いにくい。なお，アイヌ語ci (ciye チイエ)，ci-kappo (チカポッポ：アイヌ語宗谷方言，poは「小・子」の意味。

バ^ㄊバ《大便》♯仙台(小児)・岐阜県郡上郡・大阪・岡山(『分方』補遺)，cf. バ^ㄊバ《おばあさん，老婆》は頭高アクセント。

ア^ㄊグシ《あぐら》「アグシをかく」♯=越前(『物類』)・新潟・米沢(『全方』)ア^ㄊクト《かかと》♯仙台・庄内・盛岡・東北・群馬・山梨・新潟・中部(『全方』)，アクト・アグト・アクツ(『日国大』)，語源はア《足》+クッ《端・尻・終：アイヌ語 kes ケシ，朝鮮語 끝 k^ㄊut，新発田方言ゲツ(終)・ケツ(尻)》ではないだろうか。cf. 琉球語 ㄊdu ッドゥ(『沖縄語辞典』)

との関連も考えたくなる。《甑：炊（カシクから？）》や《轂：車輪の中心部》とは形が似ていない。木（kö-）を南方系統説では原マラヤ・ポリネシア語 * kahoi を語源と見るが、カイの結びつくか。



フ「カグツ《わらで編んだ雪道用の長靴》「したでば、（貧乏神が）トントと、あの、フカグツほろいで《雪をはらって》入ってきたってなす ♪ユキグツ「北越及奥羽などにて雪をはきかじき（かんじき）を結び付て道路を踏かたむるに用ゆ」（『物類』巻4, p.140）

ユ「キゲタ《竹を割って鼻緒をつけた雪道をすべって遊ぶはきもの：この竹製のスケートですべると、固く踏み固められた雪道に4本の跡がつく》

ユキガ¹コイ、ユキガ²クイ《積もる雪と高く掘り上げた雪から家をまもるために、雪の降る前に家の周りに地面から軒下までよしず張りの囲いをめぐらす雪囲い》

ユ「キヤケ《しもやけ》 ♪《冬の季語。霜やけ・凍傷》（『日国大』），仙台・東北・越後（『全方』）

カ「ナコォリ《つらら》 ♪カナコリ越後（『物類』）・山形・会津・三重県飯南郡（『全方』），カナゴォリ愛知県海部郡，カネコリ新潟・富山・石川・飛騨・広島・大分，ボーガネ下野（『物類』），イテガネ《氷》京都府何鹿郡・福井県大飯郡，カナコォリ・～ゴォリ《金氷：①氷のように冷たいこと。また，氷。②つらら（『日国大』）

ボタユキ《湿気のある雪，わた雪》庄内（『浜荻』）・越後（『物類』）・新潟・大分，《大つぶの雪》敦賀（以上『全方』）

ゾ「ケユキ《とけかけたザクザクの雪》 ♪ゾ「ケル【下1段・自動詞】《古くなった雪がとけかけ，ザクザクになる》から。ゾケル《草木が徒に伸びる》愛知県幡豆郡（『全方』），《性的に早熟なことをする》奈良（『分方』），《品行がくずれる，みだらなことをする，素行が乱れる，ぞれる》「地女のぞけたやうになるもよほど笑止なもの（洒落本・浪花色八卦）」（『日国大』）」

テ¹ンカ《固く固めた雪玉：ぶつけ合って固さを競う》 ♪《雪合戦の雪の塊》新潟県新発田（『分方』補遺）とあるが，普通の雪玉とちがひ，人に当てることのできない固い氷のような玉をテンカと言った。「天下」の意味か，テ（ン）コモリ《ご飯の山盛り》のテンコ《頂上》を競う意味か。固めた雪玉を塩をまぜた戸外の雪に1晩埋め，明るる日取り出す。子どもが乗っても割れない。

ぼる。やがて、体じゅう汗みどろになり、帽子や上着を雪の上に投げ、時にはシャツまでぬいで、雪おろしをつづける。落とした雪がのき下に山とつもって、ひさしにとどくと、犬のコロが大喜びで庭から屋根に上がって来る。しかし、雪国の人間は喜んでバカシ イランナィもんだテバ。

雪を掃ふは落花をはらふに対して風雅の一ツとし、和漢の吟詠あまた見えたれども、かゝる大雪をはらふは風雅の状にあらず。初雪の積もりたるをそのまゝにおけば、再び下る雪を添へて一丈にあまる事もあれば、一度降ば一度掃ふ。是を里言に雪掘といふ。土が掘がごとくするゆゑに斯いふ也。(中略)

此雪いくばくの力をつひやし、いくばくの錢を費し、終日ほりたる跡へその夜大雪降り、夜明けて見れば元のごとし。かかる時は主人はさら也。下人ども頭を低て歎息をつくのみ也。(鈴木牧之『北越雪譜』p.16)

† † †

ユキオ¹ロシ《①屋根の雪を掘って落とす作業；11月末から12月，②雪の降る直前にとどろく雷》¹①②とも＝標・冬の季語(日国大)，「越後路や女ばかりの雪おろし」岩間きよ(『歳時記』雪卸)，『分方』に《12月中旬の風雨。「これはユキオロシの雷だ」新潟》とある。ユキオコシ《雪の降る前に鳴る雷：冬の季語》飛騨・敦賀・鳥取・西美作(『全方』)，胴鳴《遠雷のような雪の前の山鳴り》(『北越』p.12)，『北越奇談』(1811・文化8)に「古の七奇」として焼土・焼水・白兔・海鳴・胴鳴・無縫塔・火井をあげる。秋晴れのくずれて風雨になるときに聞こえるのが山鳴りで、音源は蒲原・古志郡では三条市粟ヶ岳，岩船郡では村上市外道山などと言う。

ウ¹ミナリ《海鳴り：雪を知らせる日本海の現象》なお、雪の前の海鳴りとは別に、気象条件によっては、海から20キロほど離れた越後平野のただ中の新発田まで海鳴りが聞こえて来ることがあり、新発田の七不思議に数えられる。

ユ¹キカキ《道の雪を取りのぞくこと》¹雪掘(『北越』p.16)

コ¹スキ(コ¹スク，コシキ)《雪を掘り，取りのぞく木の道具，先が四角で長い柄がついている》¹コシキ新潟，コースキ山形・新潟・富山県砺波，コースキペラ会津，コイスキ柏崎，カイスキ青森・秋田・山形，ゴイスキ福井・京都，ゴイズキ滋賀，カイスキ青森・秋田・山形，カイスキペラ秋田(以上『全方』)，コスキ「里言にこそすきといふ。即木鋤也」(『北越』p.16)，木鋤・《全部木製の鋤；雪かきに用いる木製の鋤》(『日国大』コスキの項)。コは木くそ・木口・木鋤・木立などと同じく木[万葉仮名乙類コ，kō]が語源か。諸方言の語形を見ると、「搔き」カキ→カイ

アネサ^マ《若奥様》，アネ^サ《嫁，若いおかみさん》cf. 朝鮮語で《妻，家内》を an（古いつづり an-hai，俗語 an）と言うが，意味は「an《内，中》+ ai《子》」か。アネという発音の似通いは偶然か。

ア^ネ《若い女；やや軽んじた表現》[ア^ネ《姉》は平板アクセント] cf. 朝鮮語 anni《（妹から見た）姉；若い女性によびかける場合にも》。

オ^ジ，オ^{ンズ}《次男・3男；弟》，オジゴッポ《オ^ジを軽んじた表現》[オ^ジ《伯父・叔父》は平板アクセント]

オ^バ《次女・3女；妹》[オ^バ《伯母・叔母》は平板アクセント]

ア^ヤ《子守りの女の子》¹⁾直接この意味のことばではないが，雑誌『蒲原』1982年春号の長谷川勲氏「磐船方言考・5」—父称尊卑考に青森・岩手・新潟県岩船郡のアヤ《父》，秋田・山形・新潟のアヤ《母》とタミル語の ayyā, ayyān《父》，āyāl《母》とを対照させているのが興味深い。『ドラヴィダ語源辞典』A Dravidian Etymological Dictionary（1966年版）⁽⁷⁾によれば，タミル語 ayyā《父，僧，師》，ayyān《父，目上》，āy, āyi《母》，āyāl《母，祖母》とかカンナダ語 aya《父，祖父，主》，ガドゥヴァ語 āya, ayā!《母》といった語形も見られる。ただし，日本語とドラヴィダ諸語との系統関係はまだ証明されていない。⁽⁷⁾

ヤ^ヤ，ヤヤ^コ《あかちゃん》「ヤヤ泣くすけ，だまして《あやして》寝かさねばだ⁷わ」¹⁾どちらの語形も福島・栃木・新潟・長野から西日本一帯に分布。富山・三江県度会郡でヤヤ《母》。アイヌ語 ay あい，ayay あやい，朝鮮語 ai《子》，agi, aga《あかちゃん》。

* * *

2. 4. 越後の自然の名詞

夜，コタツ¹⁾にもぐりこんで話をしている最中，ふと世間が静まりかえっていることに気づく。音がないのだ。ガラス窓つきの障子を開け，雨戸を開けると，外は夜目にもまっ白な雪の世界になっている。もう四，五十センチはつもっている。明くる日は朝から晩まで屋根にのぼって四角い板に柄のついた除雪具コ¹⁾ スキを屋根に重く降りつもった雪につきさし，四角くえぐって下に落とす。この作業もユキオ]ロシとよぶ。

寒さのしみこんだ手足を暖めにコタツのある部屋におりて行っては，また毛皮の帽子やら，えりまきやら，腰あたりまでの短めのコートなどに身をくるんで，屋根にの

(7) 藤原与一『日本語方言文法の研究』

どとも言える。「お前ごになんぼが、爺さ、面白らいあれあんでが。《おまえの家にえらく面白い爺さんがいるそうじゃないか》」（『昔話』p. 131, 加治川村金塚・石井ハル氏）

† † †

オ「トコシヨ《男の人（単数・複数）》, オトコノシヨ¹《男の人（おおよそ単数か）》

「そのオトコノシヨわ だーれだかね《だれなの》」

オ「ナゴ《女》, オ「ナゴシヨ《女の人（単数・複数）, ご婦人》「オナゴシヨガタの前でそんなこと言われろおばさ《言えるものか; 反語》」。¹ 西部方言などではオナゴ・オナゴシがとちがい、この方言では女性一般を意味する。ただし、オンナノヒトと言うよりもやや軽んじた感じがする。

ヤ「ロオ《男: 「野郎」, 粗野な表現ながら親愛の情のこもる場合にもよく用いる。》

ヤ「ロッコ《あのやっこさん, あいつ》, ヤ「ロメラ《あの連中》などの語形もある。

「ヤロが来たれば《あの男が来たからには》もおは心配いらぬこっさ《いらぬだろうよ》」

オト¹ サマ《お父様; 家長, 戸主》「<他人に> おらごのオトサマわ新潟に行つてなさるてば《父, または夫は…行つております（直訳では「行つておいでです」）》」,

¹ 新発田方言の敬語法では、よその人に向かつてても自分の親・夫などについて尊敬語を用いる。

オカ¹ サマ《お母様; 家の女主人, 奥様, おしゅうとさま》「（玄関で訪問客が）オカサマいなったかねし《奥様いらっしゃいますか》」

ダンナサマ¹《夫, ご主人様; 金持ち, [=標]》「おらごのダンナサマわ時たまイキドォリ《神経痛で胸がつまり, 息が止まるような感じ》がしなさるてさ」

ヨメ¹ゴ, ヨメ¹サ《（息子の）嫁》「さつき《田植え》だすけ, あにさまもヨメサもイィ《家》にいなさんない とえ《…ですって》」

オト¹ト, ト¹ト《父親; 年をとった男性, おじさん》

オカ¹カ, カ¹カ《年をとった女性, おばさん, 母親; 妻; 主婦, 結婚している女性》

「浜のオカカが籠たがいて《かついで》魚をば売りに来た」

ダ¹ ッツァ《とうちゃん; おそらく旧市内では用いられていなかった。1950年前後, 農村部から来る生徒が中学校でからかわれていた。》

アニ¹ サマ《若主人様, 跡継ぎの長男》, アニ¹サ, アニャサ《跡継ぎ》

ア¹ ニャマ, ア¹ ニャ, ア¹ ニャッコ《庶民層の長男; 若い男》

モシカア¹ ニャ《次男坊; もしかしたら跡継ぎのアンニャになる》

《古代語 汝》，ナ《おまえ：鳥取米子》，ナー《おまえ；八重垣島・国頭・津軽・西蒲原》『全方』・朝鮮語 $li\ n\theta$ 《君，あなた》

ネラ《おまえら，貴様たち；ンナ・ウナの複数，かなり粗野な2人称》「のめくった稲はネラ，チャッチャド刈れや《たおれた稲は，おまえたちサッサとい刈れよ》（『かるた』）」。cf. ネラ《おまえたち：山形県庄内・新潟》『全方』》

アレ（～ガタ，～ダイ）《彼，あいつ，あの者》「アレガタもかた そおで《あの連中も仲間に加えてやろうよ》。コレ・ソレは，おおよそ標準語と同じ指示代名詞の用法しかしないが，複数形コレガタを人称代名詞としてつかうこともある。

アノショ（～ガタ）《あの人（～たち）：「あの衆」か。ただし単数。コノショ・ソノショもある。》「アノショわいってか来ないねっか《あの人は一向に来ないじゃないか》」cf. ショ《人たち：山形県庄内「家のショ」 ジョ《人：大分・宮崎「このジョ」》『全方』》

2. 3. 家族の名詞

まず，家屋および家庭をあらわす，代名詞に近い名詞をあげる。英語などと異なり，日本語では家族を構成する人を示す名詞も，これまた代名詞として機動力を発揮する。

† † †

イィ⁷《いえ・うち・家庭/家屋》[＝標準語；ただし，発音は 'i: ～ 'ii, 'ie で，イエとも発音される。] ウチと大体同じように使うが，「ウチの子がそう言っていた」は「オラゴ（＝オラドコ，ウチ）の子がそォ言ったった」を「イィの子が…」とは言わない。

オラゴ《うち・わが家：オラドコからか。あるいは直接ココ・カシコのコ（乙類）か》「オラゴの家はまっとチッチャイガ」《…もっと小さいけど》，「オラゴのカカサはよォ働くてば」《…働くんだよ》⁷ cf. 朝鮮語 kos 《所》， ki （接尾語）。

オラドコ，オレトコ《わが家；私の所》「俺どご嫁に来てくった人だが。《来てくれた人かい》」（『昔話』p.67，小戸・若月トシ氏）⁽⁶⁾ ⁷ オラゴより広い意味で使える。古代語語尾ト（乙類）《所》と朝鮮語 $t\theta$ 《所》も共通か。

オマエサンドコ《あなたの所，お宅》オマエゴ《おまえの家》 連体格の助詞をはさみ，オマエサマのトコ，オマエサマのトコでもいい。ていねいにオタク（サマ）な

(6) 『しばたの昔話』の表記は，原則として旧新発田町の周辺地区の語中有声音化を写してオラドゴになっている。ただし，格助詞をはさんだ場合は「俺のどごに」（p.251，江口・斎藤ヤスさん）となる。

[e]になることも多い。⁽⁵⁾ 語中ガ行は鼻濁音にならない [g] で、 周辺地区ではワタリの鼻音をともなう [ŋga, ンガ] などになることもある。

† † †

ワタシ（〔複〕～ラ、～ドモ）[wataʃi, wadasi / ~ra, ~domo, ~ndommo ;
市の中心部の発音はワタシドモで、ワダスンドンモのような徹底した有声音化・鼻濁音化は聞かれない。]《わたくし / ~ども：あらたまった場の自称》

オレ、オラ（〔複〕～ダイ）['ore, 'oradai ~ -dɛ] 《わたし、おれ：一般的な自称、昭和20年代ごろまでは主として農村部出身の若い女性も用いた。現在も老人層の女性はつかう。》「オレ、ハァ、しょお「しだ」《わたし、はずかしいわ》、「爺さ、爺さ、俺いぐわの。」《おじいさん、私（末娘）が行くわ》（『昔話』p.2, 菅谷・松田ミイ氏）。

アァダイ ['adɛ, 'ɑ: dai (< オァダイ 'oa dai < オラダチ 'orada-tʃi)] 《おれたち》オラダチの乱暴な発音、男の子どもがよく使った。「アァダイもおしかもって、しよで」《ぼくたちもオシクラマンジュウをしようよ》。

オマイサマ（**オメサマ**；〔複〕～ガタ）['omɛsama] 《あなた（さま）：相手に対する丁寧な呼び方、女性が子どもに向かっても使った》「オメサマ、明日も来なるかねし」《あなたは明日もおいで になりますか》（仙人らしい人物が虚無僧に）「お前様方、どごいがしゃる。」《どこへおいでになるのですか》（『昔話』p.214, 下楠川・長谷川ハル氏）

オマイサン（**オメサン**；〔複〕～ガタ）《あなた：対等の相手に対する気軽な呼び方》「オメサンも行きならんかね」《あなたも / 君もいらっしゃいませんか》、「オメサンわ、こげにむつかしい漢字でも書かれるんだかね」《あんたは こんなに むづかしい漢字でも書けるのねえ》、（鬼が源頼光たちに）「おめさん方、これは何程飲んでも飲み切れねえ、あのお神酒ださがね《おみきだからね》、……」（『昔話』p.215, 下楠川・長谷川ハル氏）。

オマエ、オメ（〔複〕～ガタ）《おまえ、君：友人や目下・年下に対する呼び方》「オメもけばいいさ」《おまえも来りゃいいよ》、「オマイなん、あ]わだてば」《おまえなんか（遊びに）入れてやらないよだ》

ンナ（～ガタ）[nna (~gata)] 《おまえ；きさま；対等以下の相手に対する乱暴な言い方》「ンナも来っか？」《おまえも来るか》「ウナ、あの、蛇どご嫁に行ってくれやれ。」（「爺様」が「三番娘」に；『昔話』p.67, 小戸・若月トシ氏） ♪ ナ

(5) 「雪かがーっぽて」（p.8）2.2. 形容詞語尾複母音の発音参照。

§ 2. 普通名詞のあつかい方

日本語教育の場などにおいて外国語としての日本語を説明する場合には、名詞についても文法的記述が必要である。英語の場所を示す前置詞が *at a park* か、*in a city* か、後に来る名詞によって選り分けられる事実や、ラテン語、ロシア語の名詞の格変化（曲用）を覚えなければならないことなど、名詞に関する文法記述も重要な研究の対象ではある。

しかし、鹿児島方言などの一部の名詞と助詞の発音上の融合は別として、一般に名詞には語形変化もなく、数え方も標準語とほぼ同じであるから、方言の名詞に関しては、まず語形（発音・アクセント）、使われる条件（文体・世代など）、意味、語源、用例などを記録すればよいであろう。小論「雪かがーっぽて」「雪こざいて あべや」および「雪ふっとつ」では、形容詞・動詞・副詞の文法的な側面に焦点をあてたつもりである。ここでは、間もなく21世紀をむかえようとする今日、早くも地元で忘れ去られそうな地方色のこい名詞（いわゆる俚言に属する）の記録に焦点をあてることにする。

2. 1. 形容詞性名詞

「雪かがーっぽて—新発田方言の形容詞」（1985）の語彙に「ガ¹ッツ《くいしんぼう》」など、形容詞性名詞を30語ほど採録したので、今回は省略する。ナまたダがついて連体語になるものが多い。

ア¹ワ《みそっかす、遊び相手にされない幼児》、イノスケ《仕方のないやつ》、イチガイコキ《私の強い人》、オトコバチ《男勝り》、ショッターレ《だらしない人》、テンボコキ《うそつき》など。

2. 2. 代名詞—話し手と聞き手の関係をあらわす名詞

ほかの方言と異なり、新発田方言は、朝鮮語の敬語同様、身内の父や夫であっても、子や妻から見て目上である人については尊敬語を用いる、いわゆる絶対敬語法をとっているから、接尾語にサマ・サ（サン）がつくかどうか、重要な点である。標準語と変わりのないことばは、必要でないかぎり、省略する。

表記法は原則として新発田市中心部の発音によるが、引用では原文に従い、農村部などの発音にもとづく書き方も用いる。重母音 / ai / は、ア・イと分けて発音せず、アイとアエの中間ぐらい音価で、本論では「アイ」と書くが、単母音 [ε] または

No. 1	(2)	佐藤	615名	No. 6	(9)	伊藤	264名
No. 2	(5)	渡辺	504名	No. 7	(21)	長谷川	261名
No. 3	(6)	高橋	381名	No. 8	(34)	阿部	260名
No. 4	(7)	小林	309名	No. 9		五十嵐	220名
No. 5	(10)	斎藤	309名	No. 10		本間	198名

言うまでもなく、新発田地方の領主であった新発田氏、溝口氏の名も重要な固有名称であり、ここの出の中山安兵衛（赤穂藩堀部家に入る）、大倉喜八郎、大杉栄などの名も話題に上る。江戸時代には大田与茂七という庄屋が役人に殺され、その恨みによっておこる藩の関係者宅の火事を「与茂七火事」と呼んだ。明治17年8月15日に宮中で軍旗親授式を受けた新発田第16連隊は昭和45年8月15日に敗戦をむかえたが、ここからは本間雅晴、山下奉文、今村均などの有名な将軍が出た。

【引用文献の略語】

- 『物類』 越谷 吾山編『物類称呼』（初刊本1775・安永4→杉本つとむ解説、八坂書房1976による）
- 『北越』 鈴木牧之編『北越雪譜』（初篇1835・天保6→宮 栄二監修『校注北越雪譜』野島出版、1970）
- 『全方』 東条 操編『全国方言辞典』（初版1954年、東京堂出版）
- 『分方』 東条 操編『標準語引分類方言辞典』（初版1954年、東京堂出版）
- 『かるた』 『心のふるさと 新潟弁かるた』
- 『方古』 野口幸雄編『新潟方言と古語』（1979年、野島出版）
- 『角方』 『全国方言辞典』1～2（角川小辞典33～34、1982年、角川書店）
- 『日国大』 『日本国語大辞典』（小学館）
- 『民話』 水沢健一編『越後の民話』（『日本の未来社』3、未来社、1957年）
- 『昔話』 佐久間惇一編『しばたの昔話』（市立図書館、古地図等刊行会、1986）—（ ）内に語り手の出身地・氏名。

注：例文等の引用では、できるだけ原文の文字づかいに従うが、必要に応じて文字の種類、句読点などを変えたものもある。

^{まち} 泉町・^{いじみの} 諏訪前・^{しみずだに さしもの ふや} 五十公野・上鉄砲町(略称カミテツ)・清水谷・指物町・麩屋町・
^{よろず} 桶町・^{まち} 万町・^{かみまち} 材木町・^{まち} 旅屋小路・^{しもまち} 七軒町・^{さかえまち} 八軒町・^{しんみち} 本丸・^{かけぐら} 二ノ丸・^{おつてさき} 三ノ丸・^{とがわ} 寺町・
^わ 地蔵堂町・^{しん} 上町・^{おかまち} 中町・^{ふる} 下町・^{おとひと} 栄町・^{まち} 新道・^{おとひと} 掛倉・^{まち} 竹町・^{まち} 追手先・^{まち} 外ヶ輪・^{にしが} 西ヶ
^わ 輪・^{しん} 馬場町・^{おかまち} 同心町・^{ふる} 新徒士町・^{おとひと} 古徒士町・^{まち} 小人¹町(コビト¹マチとも)・^{まち} 紺屋
^{じょうやく} 町・^{こふなど} 職人町・^{なかぞね} 材木町・^{なかやち} 定役町・^{にいだ} 鍛冶屋小路・^{ながばたけ} 小舟渡・^{にいだ} 中曾根・^{にいだ} 中谷内・^{にいだ} 新井田・
^{ながばたけ} 長畑など

こうした古い名が「中央町・城北町・大栄町・本町」などに変わったのである。しかも、「町」はすべて漢語音でチョウとよむこととなった。新発田・溝口藩の守護神である諏訪神社の門前町、諏訪前・泉町などは「諏訪町」。しかし、8月27～29日のオスワサマ(オスウサマ)の祭礼にくり出すケンカ台輪(山車)の若い衆たちが威勢よく叫ぶのは四の町などの古い町名である。かつて水運がさかんだった時代の商家の守護神・神明神社はオシンメサマとして親しまれている。画家・^{ふきや} 落谷紅児の父親もこの廻船問屋だった。新たに「本町」や「^{ゆたか} 豊町」に入れられた^{いじみのむら} 五十公野村は、元来有力なとなり村で、旧新発田町の七軒町(シチケ¹ンチョウ)と同じ意味の七軒町(シチケ¹ンマチ)が存在した。豊町の名は新発田市の東端、羽越・磐越国境にそびえる^{いいでさん} 飯豊山から来ている。イーデ['i:de]は、日本書紀に登場する飯豊女王の読みと同じイトヨ['i:tojo]からイーデュ['i:doe]と変化したのであろう。この方言ではクロイ[kuror~kuroe]《黒い》も単母音のクレ[kure]になる。

新発田城はあやめ城、^{しょうじょう} 葛城¹と言ひ、築城のおり、キツネが現れて尾で凶面を引いたという伝説から「狐の尾引き城」ともよばれる。

1. 4. 人 名

人名については、くわしく記すゆとりがない。一般的な名字の佐藤・鈴木・渋谷・吉田・渡辺などがここでも多いこと、^{こん} 近・^{こん} 波多野・^{とうま} 相馬・^{とうま} 曾我・^{とうま} 藤間・^{とうま} 富樫・^{とうま} 星・^{とうま} 星野・^{とうま} 本間など地方色を感じさせる姓の種類が豊富なこと、50歳代以上の男性の名「^{とし} 敏^ふ 栄^{しょうえ}・^{こうえ} 庄栄^{こうえ}・^{こうえ} 幸栄」のように「栄」を用いたものがあり、女性に「リイ・サチイ・ユキイ」のように、他の地方ならば「りえ・さちえ・ゆきえ」となるはずの名前のあることに言及しておきたい。

『新発田高等学校同窓会会員名簿』昭和60年度版の「コンピュータ処理による会員の姓・名ベスト10」(p.414)によれば、会員数17,441名の内、上位の名字は次のとおり。()内の数字は全国における順位。⁽⁴⁾

(4) 佐久間 英『日本人の姓』(六芸書房, 1972年)

ライシ	来芝	《他県の人が新発田に来ること》
シ「バコー	芝高	《県立新発田高校》
シバノー	芝農	《県立新発田農業高校》

このほか、『新潟日報』（通称ニッポ）や『信濃毎日新聞』（シンマイ、下越ではあまり読まない）などの紙上では「羽越・磐越・上信越・信越」も当然よく使われる。また、新潟大学は信州大学や神戸大学と同じ発音のシンダイ（新大）と言い、新発田市民の通勤先である新潟市に人が来ることを「来港」と表現する。旧新発田町の属していた北蒲原郡はキタカンと略される。これらの固有名詞のアクセントは東京語と同じ。新潟・新発田間のJR白新線（ハクシンセン）は新潟市の白山神社と新発田市の間をさすが、新発田の略語として「新」の字を用いることは今後もあまりないだろう。新潟・新発田・新津など、県内に「新」を使う地名が多いからである。駅弁の会社の三新軒は上の3市の頭文字を採ったものであろう。

1. 3. 町名変更の政策

新発田町（新潟県では自治体の町・村をマチ・ムラと呼び、チョーやソンと言わない）は1938（昭和13）年以来近隣に合併を呼びかけ、1940（昭和15）年に鴻池村、1943（昭和18）年には猿橋村が編入され、3万ほどの人口になった。村からは「三昧橋ヲ…自動ポンプノ通ル程度ニ…」^{ふないり}「船入弥右衛門橋、一本橋ヲリヤカーノ通ル程度ニ拡張スルコト」等々の条件が出された。こうして人口3万4000に達した新発田町は1947（昭和22）年正月、市制を施行し、現在約7万5000程度。

1963（昭和38）年に市は地域統合と町名変更の基準案を発表した。この街区方式にと新しい町名には市民の強い反対があったが、115大字を23町72丁目に整理し、町内の名を「平易簡明・格調の高さ・印象のよさ」から変えるという方針であった。第1次の試案の「城豊町・諏訪町・武庸町・奉行町」などの名称は町内どうしの希望がぶつかり合い、結局すべて新しい名前に切りかえるという、現実的ではあっても、文化の伝承を軽視した政策が実施されたのである。もちろん旧城下の職業別町名に見られる階級性や市街地と農村部の名づけ方の違いに対して、平等を重んずる立場から新しい名前がつけられたという積極的、現代的な意義は認めなければならないのだが。

城下町および古来のコメの集散地にふさわしい町名がどれぐらい消されたか、その一端を紹介しよう。新発田人（シバノタノシヨ）の会話では、以来25年たった今日でも、新町名よりも便利だとして古い町名がしばしば利用されている。旧町名には次のようなものがあった。フリガナなしの「町」の字はチョーと読む。

クセントは、標準語で考える、頭高型のシ¹バタ (●○○▷)⁽¹⁾ではなく、中高校シ¹「バ¹タ (○●○○▷)である。人名の「森さん」は、平板型のモ¹リサン (○●●●▶)ではなくて、岐阜や西部 (西日本)と同じ頭高型のモ¹リサンになる。

固有名詞の問題はアクセントに関することだけではない。その地方の人名・地名そのものがすべてが当の方言体系に属すると言っている。けれども、全体を方言研究で対象とするわけにはいかないのは当然である。ただ、どのような名字や地名が多いか、そのアクセントの一般的傾向はどうか、日常よく使われる固有名詞はなにか、といった事項について、ある程度ふれる必要はあると思う。

例えば、岐阜地方に来るまでは、温泉で全国に知られる下呂市をゲ¹ロと頭高で言うとは知らなかった。平板のゲロというアクセントで呼んでいたが、こう言うと、(いささか不快な話で恐縮だが)岐阜の人には「ゲボ¹をする」(岐阜方言で「吐く」こと)に聞こえる。「中島さん」も岐阜ではナ¹カ¹シマサンで、東京式のナカジマサンではない。岐阜県では、ノ¹ーヒ、トーノー、ヒ¹エツ、ギダイ⁽²⁾などの固有名詞略語もひんばんに用いられ、旅人は地名のほかに、こうした地域の言語生活に必要な**固有名詞**も知らなければならない。

1. 2. 略語型の固有名詞

越後あるいは新発田の言語生活における重要な固有名詞として、国名の越後(現地の音韻規則に影響されて、30年前ごろには学校の黒板にもしばしばイチゴ¹と表記されたものである)の頭文字「越」および新発田の別表記である芝田の「芝」を用いた名前をあげておこう。

- | | | |
|----------------------|----|--|
| (a)エ ¹ ッサ | 越佐 | 《越後と佐渡の両国》—越佐海峡など |
| カ ¹ エツ | 下越 | 《新発田市・村上市など越後東北部》 |
| チュ ¹ ウエツ | 中越 | 《長岡市・柏崎市など越後中部》 |
| ジョ ¹ オエツ | 上越 | 《1. 上越市(旧高田市・直江津市); 2. 越後西南部; 3. 上州/群馬県と越後/新潟県》—上越国境など |
| ホク ¹ エツ | 北越 | 《越後国/新潟県》—『北越雪譜』, 北越製糸など |
| (b)キシ ⁽³⁾ | 帰芝 | 《新発田に帰ること》 |

(1) 高い声調の拍を漢詩の仄声記号「●」で、低い拍を平声記号「○」で示す。「▶, ▷」は付属語。

(2) それぞれ濃飛《美濃と飛騨》, 東濃《美濃東部》, 飛越《飛騨と越前》, 岐大《岐阜と大垣/岐阜大学》。

(3) 帰芝・来芝とも、実際には主に表記される文章語の語形であって、キシバ・ライシバと受け止めている人が多いかもしれない。

雪 お ろ し

— 新発田方言の名詞と文末表現 —

竹 端 瞭 一

「雪おろし」とは、11月末ごろ本格的な越後の冬をむかえる時期に急に空がかき曇り、突然鳴りとどろく雷のことである。その現象全体を言うこともある。新潟出身の吉田澄夫氏は雪おろしについて「突風をともなう」とのおたよりを下さった。『全国方言辞典』に、日本海側の地方で「雪おこし」とよび、富山県福野地方では11月末海上にとどろく雷を「ぶりおこし」と言うとある。鈴木牧之『北越雪譜』（1835、天保6、初篇）はこう述べている。

又海ある所は海鳴り、山ふかき処は山なる。遠雷の如し。これを里言に胴鳴りといふ。これを見、これを聞きて、雪の遠からざるを知る。(中略) 秋の彼岸前後にあり、毎年かくのごとし。^{ゆきもよひ}(雪意)。

また、降りつもった屋根の雪を落とすことも、もちろん「雪おろし」とよぶ。本稿では、新潟県新発田市方言に関する拙論「雪かがーっぽて—新発田方言の形容詞」（1985）、「雪こざいて あべや—新発田方言の動詞」（1987）につづきとして、名詞および文末表現について報告したい。

§ 1. 新発田方言の名詞

1. 1. 固有名詞と方言研究

ふつう、方言の名詞と言う場合、あまり固有名詞は取り上げない。かりに国語辞典や方言辞典に固有名詞まで採録していたら、地名・人名事典としての性格が強くなり、本来の辞書のはたらきを果たせなくなるかもしれない。しかし、英語を習う際にも、われわれ外国人は、'Japan'をはじめ、'Mary'や'Western Australia'などの固有名詞をおぼえなければならない。辞書と文法の理想像は、その言語体系による言語生活の全体に迫るべきものだ。

同じように、ほかの方言を習う場合にも、その土地の人たちが日常会話でしばしば話題に持ち出す名前は、とりあえず学習しなければならない。その地方の固有名詞もやはりその方言の言語体系の一部なのである。早い話が、「新発田」という名前のア